

子ども達の笑顔が見える展示を目指して

－主体的な制作活動とコミュニケーションが生まれる

作品展の実践と考察－

Towards the Exhibition of Children's Works with Smiles
-Practice and Consideration for the Initiative Creative
Activities and the Exhibition that Facilitate Communications-

立 崎 博 則

子ども達の笑顔が見える展示を目指して

ー主体的な制作活動とコミュニケーションが生まれる作品展の実践と考察ー

Towards the Exhibition of Children's Works with Smiles -Practice and Consideration for the Initiative Creative Activities and the Exhibition that Facilitate Communications-

立崎 博則

Hironori TACHIZAKI

青森中央短期大学 幼児保育学科

Department of Infant Education, Aomori Chuo Junior College

Key words：造形あそび、展示、制作過程、コミュニケーション、

研究目的と先行研究

本研究は、幼児保育学科の造形の授業で行ったクラス展示の際の学生の姿をみた事から始まる。学生自身が作成した作品を意図もなくブルに並べる姿から、実際の園でも子ども達の生き生きとした作品が、意図もなく並べられている作品展が少なからずあるのではないかと想像した。

幼稚園の作品展についての研究を始めるにあたり、まずはじめに現状を知るためのアンケート調査を、青森市の幼稚園に協力いただき実施した。その結果、園の先生が作品展を通して伝えたい事には「子ども達のがんばり、一人一人の個性、作品の作り方などの過程、テーマと作品作りの経過などの、作品を見ただけでは想像しにくい事が、作品展を通して伝えたい事として（立崎, 2016）」挙げられた。この調査結果から、子ども達の笑顔や頑張りを伝える展示を目標とする事にした。また、このアンケートでは、「展示を見に来た保護者と先生の会話の多くで制作の過程の出来事を伝えているという回答が多い（立崎, 2016）」

とある通り、園の先生は作品では伝えられないことは、その場で言葉で伝えている。このことから、本研究の目的を、普段の保育で伝えきれない共感を伝える、コミュニケーションの場として作品の展示を充実させる事を提案する事と設定した。

そして、アンケート調査に続き、次年度に実践を行った。実践では子どもたちの制作中の表情が見える展示方法の提案を目標として実施された。制作過程を見せる方法として映像と画像を作品と一緒に展示する作品展を計画し、効果があったかどうかアンケート調査を行った。その結果、映像や画像の記録について、映像の上映により、制作過程を見せ、子ども達の笑顔や作品を作ろうと一生懸命頑

張る姿など、作品では伝わりづらい先生が作品展を通して伝えたい事を伝える試みは成功した。しかし、「今回のように学生と子ども達の合同の制作を映像にして展示をすると、子ども達の笑顔やがんばりのほかに、学生とのやりとりもフォーカスされる（立崎、2016）」ことがわかった。一緒に制作する学生自身も人的環境として重要視される事がわかり、環境をどう見せるかについて考え直すことが課題として認識された。また、園の作品展は園児とその周りの人が対象者となることが想定できることもわかり、保護者が展示へ参加できるよう「大人も子供も楽しい参加方法や造形ワークショップを考えることが大切だと言える。（立崎、2017）」ということも1つの課題として挙げられた。

以上のことから、本研究は、保育者が作品展を通して伝えたいことである、子ども達の笑顔や頑張りを、制作過程の記録によって伝えること。様々な環境を考慮した制作活動の設定。参加したくなるような作品展を目指す事を目的とし実践計画を立てることとした。

第1章 実践方法と計画

はじめに

子ども達の笑顔や頑張りが見える展示の実施方法と計画を考えるために、3つの問いを設定した。1つ目は制作過程を見せるためには、何を記録すればいいのか。そして、どのような視点で編集したらいいのか、という記録作成について。次に制作過程が見える作品とはどんな作品か、という作品のねらいについて。最後にどのような展示にするかという課題を設定し、見に来てくれた人にどう鑑賞してもらうかという、展示方法についての問いを立てた。

調べた結果、記録に関しては可能な限り全てを記録し、子ども達同士の関わりを中心に行動や言葉を伝えるよう編集し記録を作成する事が重要だということがわかった。次に作品に関して、子ども達が主体的に様々な環境から影響を受け、そこから考え工夫する事を作品制作のねらいとし、子ども達の考えや工夫の跡が見える作品を目指す事とした。最後に展示に関して、子ども達には制作時とは異なる見せ方で新しい発見を促す展示を、また保護者には子ども達の考えた事や工夫した事を感じとり作品とコミュニケーションをとる事を目的とした展示を目指した。

この事から、子ども達と学生とで行う実践では映像と画像での記録とともに、学生に保護者に向けて子ども達の様子を伝えるという主旨でメッセージカードを作成してもらうという課題を計画した。また、作品には周りの環境から影響し、影響される素材としてビニール傘やアクリル板など透明な素材を使用する事とした。最後に展示方法として鑑賞者が主体的な鑑賞ができるよう、平面で制作した作品を立体に組み立てる工夫や展示会場でワークショップを行う事を計画した。以下より詳しく説明をしていく。

第1節 記録方法と編集の視点

第1節では、制作過程を見せる展示を目指すためには、制作過程の何を記録すればいいのか、そして、どのような視点で編集したらいいのかという問いを立て、先行文献からその必要性と、記録方法や編集の視点をまとめる事からすすめることにした。その結果、全てを記録するのが望ましく、編集や評価の視点としては、子ども同士の関わりを中心に行動や言葉を切り取り見せる事が推奨されているとわかりそれをもとに実践時の記録方法を決定していった。

はじめに、記録方法をドキュメンテーションと呼ばれる記録から子ども達の学びを見える形で表す活動をしているレジジョ・エミリアの記録方法を調べた。そこでは音声、文字、画像など様々な媒体で記録が取られ、記録した物を貼ったパネルの説明では、『壁の大きなパネルには、子ども達の作品の写真、彼らの言葉と、物語の形式を、記録媒体を用いて、子どもの学びのプロセスである、知識、情緒や人間関係の観点を創造する過程を見えるようにするのである。(池内, 2010)』と解説される様に、その記録媒体が問題ではなく子どもの学びのプロセスが見える記録の提示の仕方が望ましいと考えられる。そのため、実践では、このレジジョ・エミリアに習い、画像と動画と文字によって記録することとした。

また、記録をどのように編集するのかという視点として、スウェーデン保育のカリキュラムに定められているドキュメンテーション作成のための視点を参考にした。そこであげられているドキュメンテーションの作成の視点の1つ「フォローアップし分析すること」の項目で『子ども同士のコミュニケーションや関わり合い、子どもが参加し影響を与えること、子どもたちが就学前学校で楽しく、面白く、意義があると感じるのはどんな時かということ(白石 淑江, 水野 恵子, 2013)』と説明され、作品が出来上がる過程ではなく、子どもたちが制作の最中にどうコミュニケーションをとり、どんな事を楽しみを持っているのかという視点で編集することを推奨していると言える。以上に2点から、画像と動画と文字によって記録し、子どもが制作過程でどうコミュニケーションをとったのかという点に留意し記録を作る事とした。方法として、前年度の実践で取り入れ効果的だった映像と画像での記録(図1-1)と、新たな試みとして子ども達と共にワークショップを行う学生に保護者に向けて子ども達の様子を伝えるという主旨で作成してもらうメッセージカード(図1-2)を文字での記録として使用する事とした。



図 1-1 映像

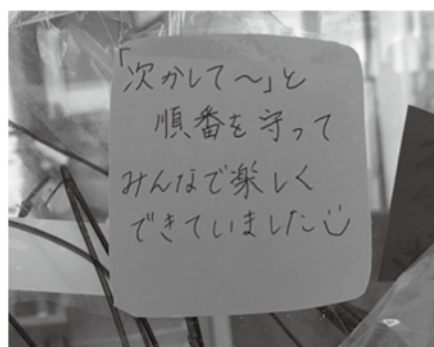


図 1-2 メッセージカード

第2節 作品と制作の計画

第2節では、作品と制作方法について考えるために、制作過程が見えやすい作品とはどういうものがあるだろうかという問いを立てた。子ども達は造形あそびを通して何から影響を受けるのか先行研究からヒントを探した。その結果、造形あそびでは子ども達が主体的に様々な環境から影響を受け、考え工夫する事を大切にするべきだという事がわかり、作品のねらいを決め、それに伴い、制作計画を決定した。

はじめに、なぜ作品自体にねらいが必要なのかというと『ねらいが明確ではない授業は、手順を示

すことが中心になります。（岡田，2017）』と言われるとおり、手順だけの活動になるとそこに子ども達の考えや工夫が見えなくなるからである。また、『図画工作では、子供が主体的に、形や色、イメージに関わることをとてもたいせつにしています。（岡田，2017）』と説明されるように、子ども達が主体的に様々な事に関わる事で、子ども達の笑顔や頑張りが見えてくるのではないかと考える。さらに、子ども達が主体的に関わる事ができれば、『子どもたちは、その新たにつくりだされた状況と、つくりだしつつあるものと、自己との間の相互作用によって、次の行為のイメージを立ち上げているのだ。こうしたことがとどまることなく展開されるのが造形あそびである。（高石 次郎，大平 修也，2017）』と説明されるように、「次はこうしてみよう。」と保育者の予測を超えた創造的な造形活動に繋がっていくと考えられる。以上の事から、作品のねらいは子ども達が様々な事柄と主体的に関わる事ができる環境からの影響が見えやすい作品を目指すこととした。

その為に、環境を道具や素材に関する物的環境、一緒に作るお友達やお兄さんお姉さん（学生）に関する人的環境、制作する場所に関する空間的環境について考える事にした。まずはじめの物的環境では、影響しあいやすい道具や素材と考え今回は透明な素材を使う事とした。透明なビニール傘（図2-1）とアクリル板（図2-2）を使い、一緒に制作する人や周りが見えやすい環境を作る事をねらいとした。また、その他の道具や水性ペンやカラービニールテープ、カラーセロファンなど制作の影響が見えやすい道具を使う。次に、人的環境と空間的環境として、子ども達に、いつもと違う場所でいつもと違う人と制作を行い刺激を得てほしいと思い、そのような環境を用意する事とした。また、単発のワークショップだけにならないよう、ビニール傘を使った活動と、同じ環境でアクリル板を使った活動を行う事により、時間的な影響（慣れなど）も考慮した。以下、実践した活動計画の詳細を説明する。



図 2-1 透明な傘で遊ぼう



図 2-2 アクリル板で遊ぼう

園名	第一幼稚園	第二幼稚園	第三幼稚園	中央文化保育園	浦町保育園	
年長児人数	58	33	29	19	45	計184名
6月 2日（金）	5班	3班	2班	1班	4班	第一回 透明な傘で遊ぼう
		合同で実施		合同で実施		
	12:50-13:35	10:40-11:25		9:30-10:15		
6月30日（金）	5班	5 班			5班	第二回 アクリル板で遊ぼう
	12:50-13:35	10:40-11:25			9:00-9:45	
7月14日（金）			5班	5班		
			10:40-11:25	9:30-10:15		
幼保一年 75名	A組	B組		C組		

図 2-3 ワークショップ日程

実践として、青森中央短期大学附属園5園の年長児（附属第一幼稚園58名、附属第二幼稚園33名、附属第三幼稚園29名、中央文化保育園19名、浦町保育園45名）と、青森中央短期大学幼児保育学科一年生（A組25名、B組25名、C組25名）が合同でワークショップを行った。学生は授業時間を活動時間とし、子ども達をその時間帯に招き活動した。場所は青森中央短期大学の幼児保育学科の造形の授業で使用している造形室とした。1回目、傘の活動「透明な傘で遊ぼう」では、図2-3のとおり、第一幼稚園、第二幼稚園と第三幼稚園、中央文化保育園と浦町保育園の3つのグループにわけ、学生A、B、C組とそれぞれ活動した。2回目のアクリル板の活動「アクリル板で遊ぼう」では日程を2日間に分け、それぞれの園できてもらい活動した。図2-3のとおり、全ての活動で子ども達も学生も5つの班に分かれて班ごとで活動を行った。以上のような計画で主体的に環境に関わる制作を目指し、それを記録にとり制作過程が見える展示を目指した。

第3節 鑑賞のポイントと展示計画

第3節では、子ども達の笑顔を伝えるために、どのような展示にするかという課題を設定し、見に来てくれた人にどう鑑賞してもらうかという問いを立て先行研究を調べた。その結果、子ども達の作品を制作時とは異なる見せ方で配置し新たな発見をしてもらう事と保護者には子ども達の作品を通して子どもとコミュニケーションする鑑賞ができるような展示を目指す事とし、それを元に作品展示の計画を作った。

はじめに、ミュージアムなどの展示を見るという体験はどのようなねらいがあるのか調べると、『新たなモノの見方に気づいたり、思いがけない関係に気づいたり、自分でもそれを真似て表現してみたくなったり、自分の感動を人に伝えたくなったりする。（中小路 久美代・山本 恭裕・川嶋 稔夫・木村 健一・岡田 猛・新藤 浩伸・影浦 峯，2014）』と考えられている。子どもの作品展であれば、子どもが自分が作った作品がいつもと違う置かれ方をしている新しい発見をしたり、友達の作品を見て真似して見たくなったり、保護者目線では、子どものいつもと違う側面が見えるなど、様々な教育的効果を期待できる展示をイメージする事ができるだろう。

また、レッジョ・エミリアでのドキュメンテーションの展示について説明した研究では『保育者は、「親たちに対してドキュメンテーションを通じて感覚をコネクトしたい。ドキュメンテーションは他者との違いを知らせるものではなく、その子の発達を理解してもらうためにある。』と語る。（伊東，2012）』とあるように、展示は作品の作者である子ども達と鑑賞する人（多くは保護者）とのコミュニケーションの場として捉える事ができる。以上の2点より、子ども達の作品を制作時とは異なる見せ方で配置する事と保護者の子ども達の作品理解（コミュニケーション）を手助ける制作過程の記録の配置に留意して展示計画を行う事とした。以下、実践した展示計画を元に詳細を説明する。



図 3-1 タワー



図 3-2 ワークショップ

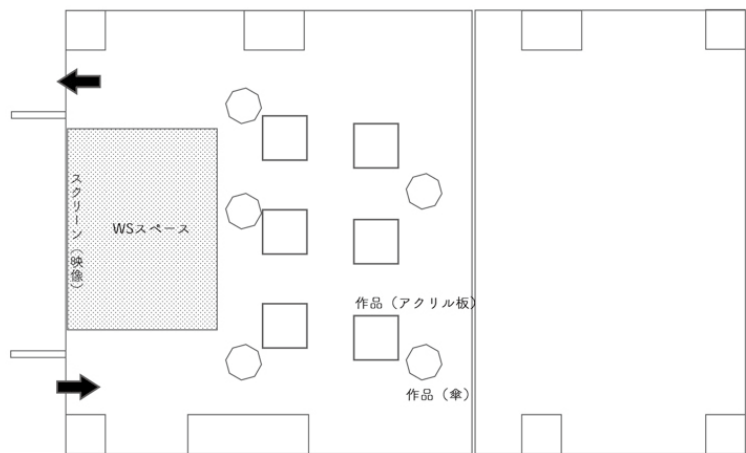


図 3-3 展示配置図

展示は、「青森中央短期大学附属園児と幼児保育学科1年生連携企画展『仲良しの色彩』展」とタイトルを決め実施した。展示日程は、青森中央短期大学の学園祭（2017年9月16、17日）とし、子どもと保護者も参加しやすい日とした。場所は青森中央短期大学713教室であり一階で外からも見える入りやすい場所となっている。「子ども達の作品を制作時とは異なる見せ方で配置する事」として、図3-1の通り、木材を組みタワーを作成しアクリル板の作品を四面に配置し対面の板と重なって見えたり、タワーの中に入ると周りの景色と重なって見えたり、傘の作品は高い位置に配置し子ども目線で天井と模様が重なるようにするなど子ども達も色々な再発見ができる配置にした。「保護者の子ども達の作品理解（コミュニケーション）を手助ける制作過程の記録の配置」として、制作過程の記録の動画を展示室のスクリーンに投影し展示空間には子ども達の声が聞こえるようにした。そのほかに学生に活動の振り返りを保護者に伝えるためのメッセージカードをアクリル板の作品に直接貼り作品とともに学生目線の制作過程を文字で鑑賞できるようになっている。そして、図3-2のように子ども達が制作した傘と同じ物が作れるワークショップを実施した。図3-3の通り、作品を配置し、その他に真ん中でワークショップを実施した。子ども達の制作を追体験する事ができるワークショップはそこで行われている制作中のワークショップ参加者を見ているだけでも作品理解を助けてくれるだろう。展示当日は子ども達と保護者がたくさん来場し自分が関わった作品がどこにあるのか探したりどういう事を考えて作ったのかなど子どもが直接保護者にお話ししたりする光景が見られた。これは作品鑑賞を考えた研究で『作者の思いや考え（と）見る人が様々意味を付け加えて、作品は完成する。

(上野, 2014)』と説明される通り、子ども達の作品も子ども達自身や保護者の主体的な鑑賞によって楽しさが見出されていくという事が言えるであろう。

第2章 アンケート調査と考察

はじめに

第1章で考察し計画した実践方法と計画で子ども達と学生の学園祭での作品展「青森中央短期大学附属園園児と幼児保育学科1年生連携企画展『仲良しの色彩』展」は実施された。第2章では、前章で考察し工夫された点が効果的に子ども達の笑顔や頑張りを伝える事が出来たのかをアンケート調査を行なった結果をみて考察していく。

まず、アンケート調査は、子ども達の笑顔や頑張りが展示の中のどの要素から伝わったのか調査し、次の課題を見つける事を目的とし、作品展当日会場内にて実施した。

次に、質問は4つ用意した。1つ目は鑑賞者と展示との関わりについて、保護者と保育関係者（保育を学ぶ学生を含む）とその他の3つの項目を用意し、選択してもらった。2つ目は展示のどの要素から子ども達の笑顔や頑張りが伝わったかを質問した。答えは10の項目から5つ選んで回答してもらった。また、3つ目にその5つの項目の中で一番伝わったものは何か、その理由とともに記述してもらった。最後の4つ目は展示の感想を幅広く自由記述方式で回答してもらった。

アンケートの結果は、1つ目の質問から子ども達の保護者が展示の主な鑑賞者だった事がわかった。次に映像、アクリル板の作品、傘の作品という順番で子ども達の笑顔や頑張りが伝わったという結果になった。また、展示との関わり別でみると保護者は子ども達の笑顔や頑張りを映像から受け取ったのに対し、保育関係とその他の方は目の前にある作品から子ども達の笑顔や頑張りを受け取るという傾向が見えた。さらに、3つ目の質問での一番伝わった理由から、保護者と保育関係者の鑑賞の視点に差異がある事が見えた。保護者は子ども達の姿を鑑賞の重要な点としているのに対し、保育関係者は子ども達の笑顔や頑張りを想像できる点を重要視しているという傾向がみられた。また、その他にも展示の感想から様々な展示の改善点があげられ今後の課題が見えてきた。以下より詳しく説明していく。

第1節 アンケート調査について

第1節ではアンケート調査について実施の目的と方法について説明する。はじめにアンケートの目的として、子ども達の笑顔や頑張りが見える作品展の評価として、どの要素から子ども達の笑顔や頑張りが伝わったのか調査・考察し、そこから次の課題を見つける事を目的としてアンケートを実施した。方法は、調査日時は学園祭の展示時間中（9/16、17の12:00～15:00）とし、場所は展示場所である、青森中央短期大学713教室となる。調査対象者は展示来場者とし、展示当日の会場で来場者に、学生スタッフが直接お願いし、その場で記入してもらい2日間計6時間の調査で45枚のアンケートが回収された。

質問項目は全部で4つ用意した。

1つ目の問いは、展示との関わりについて「あなたの展示との関わりを教えてください。」という問いについて、a. 保護者、子ども達の家族、b. 保育関係者または保育者を目指す学生、c. その他の3

つの選択肢を用意した。前年度の実践結果から鑑賞者の多くは子ども達の保護者と青森中央短期大学の学生と卒業生(保育士など)に分類されていたため、保護者と保育関係者とその他に分類し調査した。

2つ目の問いでは10の項目を用意し「作品の展示を見て、どの項目から子ども達の笑顔や頑張りが伝わりましたか？」と問い選んでもらった。項目は3つに分類されており、【作品】から、1.傘の作品「楽しい透明な傘」、2.板の作品「仲良しの透明な板」、3.透明な板に貼られた幼児保育学科1年生が書いたメッセージカード、4.各園のタワーの装飾の4項目、【映像と写真】から、5.スクリーンに流れている制作風景の映像、6.制作風景の写真の2項目、【展示会場】から7.作品などの配置の見せ方、8.展示での学生スタッフ(説明ややりとりなど)、9.当日、展示会場で行われていたワークショップに用意された道具や材料やブルーシートなど制作環境、10.当日、展示会場で行われていたワークショップで実際に作った体験の全10項目から選んでもらった。

そして、3つ目の問いで、「上記で選んだ5つの項目の中で子ども達の笑顔や頑張りが一番伝わった項目を選び、理由を教えてください。」という質問から1番効果的なだった物とその理由を明記してもらった。

最後の4つ目の問いでは「展示の感想を教えてください。(よかったところや、もっとこうなれば面白いという意見をお願いします。)」と質問し、全体の感想を聞いた。

また、倫理的配慮に関して、この調査は、青森中央短期大学研究活動推進委員会倫理審査会の承認を得て実施している。

第2節 アンケート結果と考察について

第2節では、アンケート項目別に4つに分けその結果と考察について説明する。

展示との関わり	回答数	割合
a.保護者	25	56%
b.保育関係	6	13%
c.その他	14	31%
合計	45	100%

図4 問1「あなたの展示との関わりを教えてください。」結果

まず、はじめに展示との関わり(図4)について見ていきたい。回答数45に対して保護者が25で割合は全体の56%、保育関係(短期大学卒業生や学生)が6で13%、その他が14で31%となった。このその他には青森中央短期大学の幼児保育学科以外の学生などが含まれると考えられる。前年度と同様、子ども達の保護者が展示の主な鑑賞者となった。

票数、()内は%

	作品：傘	作品：板	メッセージ カード	装飾	映像	写真	作品の配 置	学生ス タッフ	WSの環境	WSの体験	合計
保護者 (25)	19 (16)	17 (15)	9 (8)	9 (8)	22 (19)	15 (13)	6 (5)	4 (3)	7 (6)	8 (7)	116(100)
保育関係 (6)	4 (17)	5 (21)	4 (17)	1 (4)	4 (17)	3 (13)	2 (8)	0 (0)	1 (4)	0 (0)	24 (100)
その他 (14)	11 (20)	11 (20)	7 (13)	7 (13)	9 (17)	3 (6)	3 (6)	1 (2)	1 (2)	1 (2)	54 (100)
合計	34 (17)	33 (17)	20 (10)	17 (9)	35 (18)	21 (11)	11 (6)	5 (3)	9 (5)	9 (5)	194 (100)

図5 問2「どの項目から子ども達の笑顔や頑張りが伝わりましたか？」結果

次にアンケートの質問の2つ目「作品の展示を見て、どの項目から子ども達の笑顔や頑張りが伝わりましたか？」の結果（図5）を見ていきたい。この質問は10の項目から5つ選び丸をつけてもらうという調査方法をとったが、全ての回答で5つの丸がついたわけではなく図5の右端の合計が、丸のついた総数となっている。全体の集計結果を見ると用意した10個の項目のうち、傘の作品とアクリル板の作品、そして、映像が上位を占めた。中でも映像が一番多くの票を集めた。その為、映像、アクリル板の作品、傘の作品という順番で子ども達の笑顔や頑張りが伝わったということが言えるだろう。また、回答者の「展示との関わり」別に見ると、保護者が一番多くあげたのが映像となっている。それに続いて傘とアクリル板の作品となっているのに対して、保育関係とその他では、映像には票が集まらず作品に集中している。この事から保護者は自分の子どもを含め、子ども達の笑顔や頑張りを映像から受け取ったのと比べて、事前に子ども達を知らない保育関係とその他の方は目の前にある作品から子ども達の笑顔や頑張りを受け取ったと言えるだろう。もう一点、保護者の回答で少ないながらも当日の展示の中で行われていたワークショップの項目にも票が入っていることは無視できない。ワークショップに参加していただいた保護者は、子ども達の制作を体験できたと言っても良いだろう。最後に、学生によるメッセージカードについて、保護者とその他の票が10%前後に対して、保育関係からは20%に迫る票が集まり関心の高さが伺える。文字による記録は子ども達の記録とともに学生の視点を表現し、保育者に近い視点がそこに存在し、保育者が伝えたい笑顔や頑張りが保育者目線で表現されていたのではないかと推測される。

票数、()内は%

	a (保護者)	b (保育関係)	c (その他)	合計
1 作品：傘	3(12)	0(0)	1(7)	4(8)
2 作品：板	3(12)	3(50)	7(50)	13(28)
3 メッセージ	0(0)	2(33)	0(0)	2(4)
4 装飾	1(4)	0(0)	0(0)	1(2)
5 映像	10(40)	1(16)	4(28)	15(33)
6 写真	0(0)	0(0)	1(7)	1(2)
10 WSの体験	3(12)	0(0)	0(0)	3(6)
(空白)	5(20)	0(0)	1(7)	6(13)
合計	25(100)	6(100)	14(100)	45(100)

図6 問3「子ども達の笑顔や頑張りが一番伝わった項目を選び、理由を教えてください。」結果1

保護者	
③一番伝わった媒体	その理由
1 作品：傘	傘の作品はいいアイディアだと思う 一緒にいた6,7歳の子どもが入り口を見るなり すごーいと走り込んでいました
2 作品：板	子ども達が作ったものを見れた 子ども達が楽しそうに制作する様子がわかり良かった 子どもの自由な感じが出ていて良かった
5 映像	楽しそうにやっているから (映像が) 一番わかりやすく伝わる 子ども達が一生懸命かつ笑顔で制作している姿が見えるため どんな風に制作が行われたか見れるのが良い でも教室が明るくて見えづらかった 子ども達の表情が生き生きしている 動きや表情が見えるから 楽しそうに絵を描いたりしている様子がわかるから みんな楽しそうで生き生きしていたから
10 ワークショップの	子どもの自由な発想を受容して明るく関わってくれました

14

保育関係	
③一番伝わった媒体	その理由
2 作品：板	一枚の板を何人かの子ども達がそれぞれに作っていて見ていて楽しい 子ども達が喜んで書いているのが伝わってきた 目につきやすい
3 メッセージカード	子供と一緒に作りあげる様子が良かった
5 映像	実際の様子が一番わかりやすく伝わってきます

5

その他	
③一番伝わった媒体	その理由
1 作品：傘	どれも自由なデザインで子ども達の笑顔が伝わった
2 作品：板	自由にのびのび描いているという印象を受けました 子ども達の想像力が培われていることが感じる 上手に作ったんだなあというのが見てわかる 同じようなモチーフが集まるところ。 1人がハートを描くとみんなが周りにハートを描くなど面白 いものは皆真似をする 板の様子だけ見ても作っている最中は 楽しかったんだらうなって想像できます
5 映像	子供の笑顔がいっぱいだから 痕跡がすごいと思う 楽しそう

図7 問3「子ども達の笑顔や頑張りが一番伝わった項目を選び、理由を教えてください。」結果2

次にアンケートの質問の3つ目「上記で選んだ5つの項目の中で子ども達の笑顔や頑張りが一番伝わった項目を選び、理由を教えてください。」の結果（図6）を見ていきたい。この質問は前節での10の項目から5つ選んで丸をつけるという質問で選んだ5つからさらに一番伝わった項目を選んでもらい、理由を書くという問いだ。ここでも全体の総評は映像（33%）とアクリル板の作品（28%）で2つを合わせて6割を超える。このため、映像を使った記録と、板の作品のねらいは効果的に伝わったと言えるだろう。またこの1番効果的だった物を選出する項目でも、ワークショップをあげる保護者は保護者の全体の12%（傘の作品と板の作品と同じ割合）となり、メッセージは保育関係の全体の33%と高い割合となっている。続けて選んだ理由の結果（図7）を見たい。ここでも全ての回答で理由が書かれていたわけではなく、図13にある通り合計で28回答（回収されたアンケート45枚中）となった。ここも得票数と同様に保護者は映像、保育関係とその他はアクリル板の作品についての理由の回答が多くなった。保護者の映像を選んだ理由として、「動きや表情が見えるから。」「子ども達

が一生懸命かつ笑顔で制作している姿が見えるため。」などの映像の記録の直接的に子ども達の様子が伝わった点をあげ、保育関係とその他がアクリル板の作品を選んだ理由では、「子ども達が喜んで書いているのが伝わってきた。」「自由にのびのび書いているという印象を受けました。」「板の様子だけ見ても作っている最中は楽しかったんだらうなって想像できます。」など、子ども達の笑顔や頑張りを想像できた点を理由としてあげている事がわかる。この違いからも保護者の鑑賞の視点と特に保育関係者の鑑賞の視点に差異がある事が見えてきた。

良い	映像について	スクリーンで実際の子供達の姿が見られるのはとてもいいと思いました
	作品について	子ども達の自分で作った作品を見て喜んだ
		各園のタワーでそれぞれ個性がありきれいでした
		色とりどりの作品が多く、子ども達の笑顔が作品から伝わってきました
		作品とメッセージカードと一緒に展示されているところが良かった
	展示について	少し展示品の名前がわかりづらかったけど、自分の作った傘をくれたのは良かった
	ワークショップについて	ワークショップで作ったものを持ち帰れると思えばいい
	全体の感想	実際に制作できる環境が良かった
		明るい感じが良かった
		とてもカラフルで良かった
		カラフルで可愛い
		面白かったですよ
		作品を作った園児と保護者が親子で見にくくと楽しいと思います
		いいと思った
		子供の興味をそえられる展示だったと思います
		子どもの自由さが伝わって良いと思った
		子ども達の頑張りが伝わった
		きれいだと思います
		明るくて十分良い
改善点	展示について	スクリーンの音が聞こえづらかった
		写真をもっと見たかった
		写真をもっとあれば良い
		メッセージが小さく読みにくく勿体無い
		年長児だけでなく、年少、年中児の制作も見られたら嬉しい、制作の主旨が説明されたボードがあれば良い
		会場の外に「幼稚園作品」などわかりやすい案内があれば良い
	作品について	バルーンとかもつと目を引くものがあれば良いかも
		テーマがあっても良かった
		一貫性のあるテーマの方が面白いかも
		傘の作品の子ども達の名前がわかりづらい
		年長さんクラスだけでなく、小さい子どもなりの作品もあればなお良い
		制作の参加のタイミングによって質が違うと思う。同じだと嬉しい

図8 問4「展示の感想を教えてください。」結果

最後にアンケートの質問の4つ目「展示の感想を教えてください。(よかったところや、もっとこうなれば面白いという意見もお願いします。)」の結果(図8)から、展示の改善点を探りたい。展示の感想は、大部分は肯定的な意見をいただいた。その中でも、3点改善点をあげたい。1つ目は写真をもっと沢山の配置し全員の子供達(5園計184名)の写真が見えるようにできればより保護者も満足感が得られるだろう。2つ目は学生に作成してもらったメッセージカードが小さく見づらかった点だ。ただし、アクリル板の作品に配置する事を考えた大きさだったためこのサイズになったが、次は読みやすさを考慮したサイズを目指したい。3つめは制作の主旨が説明されたボードがあったほうが良いという意見だ。これについて制作過程の動画の中に説明があったが常に目にとり説明を読むようにボードなども配置しておくべきであろう。以上のような点を展示の改善点としてあげておきたい。

第3章 まとめと今後の課題

まとめ

子ども達の笑顔や頑張りが見える展示の実施方法と計画を考えるために、記録、作品、展示の3点に分け方法を考察し実践した。

記録について、子ども同士の関わりを中心に行動や言葉をどう選び伝えるか保育者の視点も鑑賞の1つになると考え、映像と画像での記録とともに、学生に保護者に向けて子ども達の様子を伝えるという主旨でもらうメッセージカードを作成し展示した。作品について、作者である子ども達が主体的に様々な環境から影響を受け、そこから考え工夫した事が跡として残る素材として、ビニール傘やアクリル板など透明な素材を使用する事とした。展示について、平面的に制作した作品を立体的に組み直し展示する事、制作過程の動画、子ども達の様子のメッセージカードとともに、実際に同じ作品が作れるワークショップも実施し子ども達の制作を迫体験できる環境を作り、展示を見にきた子ども達自身や保護者の主体的な鑑賞によって作品展の楽しさがより見出される展示を計画した。

以上の3点に工夫をした作品展が青森中央短期大学の学園祭にて実施された。そして、当日会場内で子ども達の笑顔や頑張りが見える展示の中のどの要素から伝わったのかについてアンケート調査を行なった。結果から、作品展の来場者は、保護者が展示の主な鑑賞者である事が確認された。また、短期大学での作品展では（学生や、保育者として就職した卒業生を含む）保育関係者も多かった。子ども達の笑顔や頑張りが見える要素を5つ選んでもらう質問では、「映像」、「アクリル板の作品」、「傘の作品」という順番で票が集まった。また、展示との関わり別でみると、保護者は制作過程の記録である「映像」を評価し、保育関係とその他は、「アクリル板の作品」を選んだことから、「作品」を評価した事がわかる。さらに、続く一番子ども達の笑顔や頑張りが見える要素とその理由を聞いた質問では、保護者は映像を選んだ理由について、子ども達の姿が直接伝わる事をあげている。制作過程の記録が効果的に保護者に子どもの様子を伝えたとと言える。それに対し、保育関係では、アクリル板の作品に意見が集まり、作品から子ども達の様子が想像できる点を理由としてあげていた。周りの環境に影響されながら子どもが考えたり工夫した跡が見える作品が効果的に保育者へ子どもの様子を伝えたとと言える。また、鑑賞者が展示に参加する事をねらいとしたワークショップにも保護者から票が入っており、展示参加の入り口となったと言える。保育関係の方からは、文字による記録である学生によるメッセージカードが選ばれ、保育者目線の記録が注目されたのではないかと推測する。その他、感想から今後の改善点が挙げられた。

今後の課題

今回の実践で、保護者と保育関係者の作品展を鑑賞する視点の違いが明らかになった。保護者は映像の中や会場でのワークショップで遊ぶ子どもの姿など直接見える姿を見ている。それに対して、保育関係者は、作品やメッセージカードから想像できる子ども達の姿を見ていた。前年度に青森市内の幼稚園を対象として行なったアンケートでは、保育者が作品展を通して伝えたいことは「子ども達の笑顔と頑張り[立崎, 2016]」であった、しかし、その子ども達の姿も映像から直接受け取れるものと、作品や文字から想像して受け取ってもらいたい物があるのかもしれないという疑問が浮かぶ。ただし、大勢の子どもをみている保育者と、子ども少数人を見る保護者が作品鑑賞する時の見方に違いが出るのは当然とも言えるし、特にグループで作る作品から個人を想像するのは簡単な事ではない。よって、

子ども1人1人の作品から鑑賞を進めていくほうがいいと考えられる。また、鑑賞して欲しいポイントについてもより詳しい形で保護者（またその他の鑑賞者）に提示するのも1つの手段だと言えるだろうし、タイトルや主旨を伏せ想像を楽しむ展示のスタイルも有効的だろう。

また、保護者が今のところメインの来場者／鑑賞者ではあるが、もっと他の人が集まる展示を目指しても良いかもしれない。地域の保育者が集まる作品展を企画し保育者同士が集まり交流を持つ事は、小学校などその後の子ども達の成長にも繋がる。また、保護者も一緒に行う鑑賞についての勉強会のようなものを開催し「保育者の見て欲しいところ」を説明する時間を作ることも必要かもしれない。それは地域の短大などの教育機関が中心となるにはちょうどいい。さらに子ども達自身が作品について語るアーティストトークのような時間も考えられる。作品が出来上がって終わる造形遊びから、作品から始まるコミュニケーションが中心の鑑賞という造形あそびが有効だと考えられる。

引用文献

- 池内慈朗. 2010. “レジジョ・エミリアとハーバード・プロジェクト・ゼロによるコラボレーション Making Learning Visible : 幼児教育から学ぶドキュメンテーションによる学習過程の可視化.” 美術科教育学会誌 31.
- 上野行一. 2014. 風神雷神はなぜ笑っているのか (対話による鑑賞完全講座). 光村図書出版.
- 伊東久実. 2012. “レジジョ・アプローチによるドキュメンテーションの実例検討.” 身延論叢 [17].
- 岡田京子. 2017. 成長する授業: 子供と教師をつなぐ図画工作. 東洋館出版社.
- 白石 淑江, 水野 恵子. 2013. スウェーデン 保育の今 — テーマ活動とドキュメンテーション. かもがわ出版.
- 高石 次郎, 大平 修也. 2017. “「つくること」にある‘素材・技術・工程’と, そこに生じる‘人と人／もの／ことの関係’を認識すること - 「生きられる空間」を実感する造形活動を通して -.” 兵庫教育大学 教育実践学論集.
- 立崎博則. 2016. “幼稚園の作品展の可能性の研究の為の現状調査.” 青森中央短期大学研究紀要 [29].
- 立崎博則. 2017. “幼稚園の作品展の可能性の研究の為の実践と考察.” 青森中央短期大学研究紀要 [30].
- 中小路 久美代・山本 恭裕・川嶋 稔夫・木村 健一・岡田 猛・新藤 浩伸・影浦峽. 2014. “ミュージアムにおける触発する体験と体験を触発するということ.” 人工知能学会全国大会論文集 28.

